

論文要旨

1. 背景

日常生活行動援助は看護学生が初めて看護実践の場で対象者へ実践する援助である。生活体験が少なくなっていると言われていた近年の看護学生が、自身の日常生活行動の認識を基に対象者との相互行為から対象者の日常生活を捉え、的確な援助を実践するには基礎看護学実習担当教員による教育的な関わりが必要である。

2. 目的

教員が基礎看護学実習における学生の日常生活行動援助の実施場面で、どのように学生の学習支援の必要性を把握し、学習を支援する行為を生じさせているのか、その過程を構造化し、基礎看護学実習における教員の学習支援方略を明らかにする。

3. 方法

研究デザインは質的研究を選択した。研究参加者の要件として、基礎看護学実習での学生指導を3年以上経験し、現在も継続して実習を担当している者とした。東京および東京近郊の看護系大学のうち面接可能な範囲に所在しており、看護学科開設から5年以上経過している大学26校へ研究協力を依頼し、承諾の得られた大学の教員に対して研究参加協力を依頼した。承諾の得られた11名の教員に対して半構成的面接法を用いてインタビューを行った。インタビューは参加者の同意を得て録音し逐語録を作成した。得られたデータはグラウンデッド・セオリー・アプローチの分析手法を用いて分析した。教員の語りに基づき、類似点や相違点を見出しながらカテゴリー生成を行い、概念化を行った。本研究は聖路加国際大学研究倫理審査委員会の承認を得て実施した。(承認番号: 16-A009)

4. 結果

分析の結果、5個の主要カテゴリー、10個のカテゴリー、17個のサブカテゴリーが抽出された。基礎看護学実習における学生の日常生活行動援助実践に向けた教育的支援は、教員が学生と教員との間に日常生活行動援助の概念の違いがあることに気付く〔学習支援の必要性の把握〕をすることから始まる。その後、日常生活行動概念の内化を促しながら〔個々の患者に応じた援助創出への支援〕を生じさせる。そして患者が生活している文脈の中で患者と学生双方の状況に対する熟達した臨床判断力を活かし〔援助実践中の支援〕を行い、援助実践後には学生の実践場面を抽出し振り返りの場において〔援助の実践力向上への支援〕を生じさせる。教員の教育的支援は〔教育的支援の成果の把握〕として帰結する。

5. 結論

本研究において、基礎看護学実習における学生の日常生活行動援助実践に向けた教育的支援は、教員が学生の学習状況を把握することからはじまり、学生との対話や援助実践のモデルを示すこと、学生の援助実践場面の抽出と振り返りなどの具体的支援を通して、学生が他者(患者)志向的な日常生活行動援助の実践を可能にする行為として構造化された。本研究で初めての臨地実習で患者への日常生活行動援助を実践する学生に向けた教員の教育的支援を構造化したことは、臨地実習における学生の学習を支援するだけでなく、看護基礎教育を通して、日常生活行動援助の概念発達への支援方略を考える一助となる。